

植竹桃子（東京家政学院短大）

目的 前回大会で、長く伸ばした爪は、行う作業によっては不都合が生じることを報告した。今回は、伸ばした爪の許容限界値、すなわち手作業の妨げにならない程度に伸ばせる爪の長さを把握することを試みた。

方法 被験者は、日頃は爪を伸ばしておらず且つ正しく並縫いができる成人女子4名（19歳，26歳，41歳，55歳）である。実験項目は、長く伸ばした爪では不都合が生じる手作業のうち、被服造形の実習授業に必要な作業（並縫い，糸結びテスト）、学生の勉学に必要な作業（鉛筆で字を書く）、手指の巧緻性検査としての棒挿し（マッチボード）の、計4項目である。実験条件は、指先点まで爪がある状態を爪の伸び0mmとし、指先点から2mm，4mm，6mm伸びた状態に長さを整えたネイルチップ（つけ爪）を爪に貼りつけ、計4水準とした。実験は、爪の長さ1水準につき、順序をランダムに設定した4実験項目を3回反復測定し、異なる日に爪の長さ水準を変えた実験を同様に行なった。なお、実験初日の爪の長さ水準は0mmとし、その後の水準の順序は被験者ごとにランダム化した。同時に、爪の長さに対する主観及び作業への影響についての、官能検査を行なった。

結果 ①長い爪が手作業能率の低下に有意に影響を与えるのは、実験4項目のうち並縫い，糸結びテスト，棒挿しであった。②多重比較の結果、爪0mmの作業能率と有意に差が生じるのは、糸結びでは2mmから、並縫い，棒挿しでは4mmから、字では6mmからであった。③爪を伸ばすことに対して被験者は、2mmまでをおおむね好意的にとらえていた。